

第六回宮古島文学賞 選考評

もりお みずき

小説を読む時、その作品世界に入り、登場人物たちと共に生きていくような気持ちになることがある。そんな時はほんとに楽しい。

しかし第六回の最終候補作品八編は時代の投影だろうか暗い作品が多く、主人公たちが苦しみ悲しんでいた。読み続けることが少し辛いようでもあった。

「洗骨の浜」。亡き夫の洗骨のために七年ぶりに島に戻った愛子は夫の右腕だけが成仏していない事を知る。愛子は島の活性化に取り組んでいた夫の遺志を継ぎ、島で生きていくことを決意する。成仏していない右腕というミステリアスな設定に少々無理を感じた。

「スケープゴートは島を想う」はある小さな島で育った優秀な姉三津と弟光輝の長い人生の物語。二人はそれぞれ大成する。しかし親の苦労や島の戦争中の受難の歴史を知り、島に貢献するために二人は島に戻る。小説として生まれる以前の草稿のようであった。

「蘇生」。生きていたと思わなくなった

高校生の颯太は自殺を図る。親友の岳の助けや若女将琉実との出会いによって長生きして

幸福に暮らしたいという願いを抱くにいたる。  
哲学的な颯太の思考と肝心の颯太の悩みや行動がアンバランスな感じを受ける。

「颯風」にはまさに柔らかい風が吹き渡っていた。軽やかなテンポの爽快な作品。ユタも基地も出ない沖縄。海と空と星砂と太陽の砂。そして東京の愛すべき女性麻衣。「ここに何も無いという場所がある」と涼太。その言葉に感動し、麻衣は自身をリセットする。

「神々の宿る島」。我が子を虐待死させるというこの世で最も悲惨な出来事を作品化している。抜群の表現力である。風葬の崖で乱舞するアサギマダラ。私は白骨化した我が子と夫の側で横になり死を待つ。冥くらい世界を彷徨っている私に救いはあるのか。

受賞作品「ソラピートの夢」は本文学賞初の歴

史小説である。宮古島の王とも言うべき仲宗根なかそね

豊見親とゆみや、童名は空広。大阪府在住の作者は多くの参考文献を読破し尽くし、南海の一孤島の歴史を壮大な誇らかな叙事詩として完成してくれた。感謝に堪えない。

二席は「檻の魚」。崩壊寸前の一族の日常を繊細に描ききった。不登校の中三の浩一の心は

奥深く切ない。浩一は母の命令で病弱な祖父と毎日釣りにいく。ある日大物を釣り逃がす。そのとき二人の中で何かが変わる。家族の再生を予兆させ物語は静かに終わる。

佳作「カルロタコ、食べますか?」。なぜか時代も国籍も超越したような作品。ファンタジーのように始まった物語は後半、島のゴルフ場開発をめぐる放火事件と殺人事件が浮上してきてシリアスになる。島中に湧いてくる赤い鳥の不思議。自由な発想で生まれた物語の妙味。

三年ぶりの対面での選考会は静かに熱く続いた。うれしい時間だった。この文学賞が生きがたい今の時代を照らす光のひとつとなれますようにと切に願っている。